実践報告

運動面に配慮を要する知的障害幼児への発達支援の取り組み

～複数機関との連携を通して～

高橋　幸子*　大蔵みどり*　上田みどり*　福谷　憲司*　吉井　勘人*
上仮屋祐介*　仲野　みこ*　田丸　秋穂**　城戸　宏則**　野村　勝彦***

知的障害特別支援学校幼稚部に在籍する幼児に対し、「個別教育計画」に基づく発達支援に取り組んだ。対象児はモワットウィルソン症候群で立位や移動に支援を要した。集団活動への参加を通して外界への関心や意欲を育てるとともに運動発達の促進をめざした。補助具の活用や適切な援助方法については、肢体不自由教育や医療機関の専門家と連携して支援に取り組んだ。その結果、友だちへの意識が高まり、友だちと一緒に活動する中で、運動面を始め諸側面の発達が見られた。

1．はじめに

昨年度、子育て支援ひろば事業の取り組みから、複数の機関が連携して支援を開始した事例について報告をした（高橋ら 2010）。対象となった幼児はモワットウイルソン症候群と診断されている。この障害は 2001 年に責任遺伝子が特定され、確定診断が可能になってから比較的日の浅い症候群である。発達的には「始歩は３～６歳。精神遅滞は重度であるが、周りの人とコミュニケーションを楽しめる子が多い。」と説明されている。(水野)

さて、ダウン症のように知的障害とともに低緊張や関節の可動域に制限があり運動発達に遅れがみられる幼児とって、どのような配慮やどのような側面からの働きかけが求められるのであろうか。また、そのために最適な支援の場や環境はどのようなものであろうか。

村中（2011）は、統合保育を受けている肢体不自由児の例を挙げ、「多くの子ども達に囲まれて遊ぶことは対象児の運動量確保において意味がある」とし、他児からの「働きかけによって対象児の動きが促された」と報告している。また、澤江（2012）は発達障害のある子どもについて、「運動発達面の問題は、運動発達領域に閉じた問題ではなく、認知面や情動面、社会性などとの関連を想定しておく必要がある」としている。知的障害幼児にとって、諸側面の発達を促すことの重要性と、運動への意欲を導く環境の必要性が示唆されている。

対象児の保護者も、運動発達面の遅れは顕著であるが、本児（以下Ａ児）の障害特性から考え、動きがある幼児集団の刺激が必要と判断し、特別支援学校（知的障害）幼稚部（以下　知的障害幼稚部）への入学を選択した。

知的障害幼稚部においては、「個別教育計画」を策定し、Ａ児の全体的な成長発達をめざして教育的支援を開始した。運動発達については、他機関との連携は不可欠であり、直接、間接を問わず、継続した連携の取り組みを行うことをめざした。

本稿においては、他機関との連携の取り組みを軸に、入学して１年半余りのＡ児の成長の様子を報告する。

2．知的障害幼稚部における取り組みについて

1）入学にあたっての情報収集

入学前、および入学時には、下記のような書類提出と必要に応じた面談を実施した。

①　入学前の情報収集

・健康調査書（主治医による診断と病歴・服薬の状況など）
・生育調査書（生育歴、診断の時期と診断機関など）
・幼児調査書（療育歴、日常生活・コミュニケーション、遊びなどの全般的発達状況についての具体的様子）
・面談……通学方法、通学経路、通学時間、通学の負担の状況、入学に当たっての不安、希望、他機関との併用希望の有無、入学後に身につけさせたいと願っていること、現在の家庭での悩みや困り感など）

本児については、特に知的障害幼稚部が、本児にとって日中を過ごす教育の場として適切であるのかどうか、事前調査も行っている。事前に利用機関を訪問して療育の状況を見学したり、子育てひろば利用時に桐が丘特別支援学校コーディネーターに参観してもらったりするなど、幼稚部の学習参加への可能性と配慮について諸側面

*筑波大学附属大塚特別支援学校　**筑波大学附属桐が丘特別支援学校　***筑波大学特別支援教育研究センター

から検討した。

② 入学後の情報収集

・保健調査（通院、服薬状況、発作等の現状など）

・診療情報提供書（主治医よりの症状および治療経過、服薬、学校生活上の配慮についての説明）

・面談……座位の保持や移動時の配慮、発作時の対応など、特に医療健康面についての情報収集は養護教諭同席で綿密に行った。摂食については食材の形状や使用食器、援助方法など、栄養教諭も同席し、給食開始後の対応に備えた。

これらの情報をもとに学校生活をスタートし、その後の各種アセスメントを経て、「個別教育計画」策定に至った。

2）アセスメントと「個別教育計画」策定

幼稚部における新入児の「個別教育計画」策定までの流れは Table1 の通りである。A児については、特に他機関との連携の重要性を踏まえながら、毎日を過ごす幼稚部での学びをどのように構築していくかが一番の課題となった。桐が丘特別支援学校支援部コーディネーター（以下、桐が丘コーディネーター）との協議のもとで作成したのが Table2 の個別教育計画である。

知的障害幼稚部が作成した原案における目標設定の妥当性について確認した後、具体的手だて等について、下記のように様々な示唆が得られた。（記号は、計画上の「桐が丘アドバイス」欄と一致）

a．生活面の「食事」については、まず、手を添えて介

Table 1　幼稚部におけるアセスメントと「個別教育計画」策定の流れ

	主な行事	保護者参画	新入児共通	連携の取り組み（A 児）
3月			・入学前療育機関との引き継ぎ **第Ⅰ期**	・入学前療育機関との引き継ぎ、参観、情報提供
4月	始業式 入学式 春の遠足	質問紙記入	アセスメント期間 ・生育歴　・保健調査 ・個人調査票 ・入学前療育機関との引き継ぎ資料 ・生活習慣調査（幼児の興味、関心、遊びについてのアンケート含む） ・給食開始前の食事調査 ・S・M式社会・生活能力検査	・桐が丘特別支援学校支援部教員の参観 →座位の保持、移動援助用の椅子提供、調整 ・幼稚部教員がPT 訓練、OT 訓練、ST 訓練を参観
5月	新入児給食開始 運動会	家庭訪問	・乳幼児精神発達診断法 ・乳幼児のコミュニケーション発達アセスメント（ＡＳＣ） ・KIDS 個別教育計画作成	・桐が丘特別支援学校支援部教員よりコンサルテーション →PT、OT よりの情報を伝達、解説
6月	水遊び開始 交流保育 夏休み	提出 個人面談	関係機関との連絡調整、 支援会議開催	→「個別教育計画」策定に関与
7月	夏季保育	ホームワーク	**第Ⅱ期** 個別の教育支援計画策定、確認 個別教育計画評価・見直し	
8月 9月 10月	教育実習受け入れ 秋の遠足	個人面談 あゆみ		・幼稚部教員がPT 訓練、OT 訓練を参観 ・桐が丘特別支援学校支援部教員のコンサルテーション
11月 12月 1月 2月 3月	大塚祭 入学選考 お楽しみ会 もちつき大会 お別れ会 修了式	個人面談 あゆみ	個別教育計画策定 機関連携・支援会議 個別の教育支援計画策定、確認	・PT、OT の巡回、桐が丘特別支援学校支援部教員による補足説明

Table2　協働で作成した個別教育計画

【記入日　201 X年６月X日】

本校及び関係機関での教育支援　　【記入者　　】

今年度の重点目標（長期目標）		・身近な人との関係を深め、経験を広げる。 ・歩行につながる運動経験をする。	
領域	前期の目標（短期）	手だて／主な学習の機会	桐が丘アドバイスから
生活　食事	・コップの使用に慣れる。 ・パンやフォークを手で持って口に運ぶ。	・トレーニングコップや普通のコップで飲む機会を多くする。 ・バナナ、パンなど、可能なものはフォークで刺してあげ、自分で持って口に運ぶようにしていく。パンは細長く棒状に切り、手で掴むようにする。	a．食べる経験を積み重ね、食事動作のイメージを持つ
身体・運動	・歩行につながるいろいろな姿勢や粗大運動を行う。 ・手指の巧緻性が高まり、掴んだり離したりができる。	・伏臥で前方や上方に手を伸ばす、座位でバランスを取る、支えられて立位を取る。寝返る、平地や緩やかな傾斜を這う、姿勢や向きを変える、台につかまって立ちあがる、支えられて歩く、足裏を付けて座るといった動作を行う。 ・感覚刺激、前庭刺激、バランスの保持のために、ブランコ、すべりだい、トランポリン、バランスボール、上下や横に回転する遊び、プール、ボールプールなどを行う。 ・えのぐ、フィンガーペインティング、スライムといった感触遊び、プラレール電車、楽器、遊具、食事などで手や指を使う機会を多くする。	b．訓練的に行うのは避ける。「体の動かし方を知る」という発想で。
コミュニケーション	・写真カードにタッチで要求を伝える。 ・呼名に対し、教員と視線を合わせ、手を合わせる	・好きな食べ物、飲み物、好きな歌、好きな電車の選択（２択）を、①実物を視線で、②写真カードを視線で、③写真カードにタッチで、④写真カードをピックアップで伝えるというステップを見通して、要求の機会がある度に、①２択を提示して「どっち？」と聞いて少し待つ（遅延）②視線を向けた側に、手を取って触らせ（身体援助）「こっち（ちょうだい・やって）」と言葉を添える。 ・教員の側からＡくんに視線を合わせ、手を合わせることから始め、少しずつ自発的な動きを待つようにする。	c．タイミングを外さず、視線を捉えて、即時にテンポよく介助する。それが動きの獲得につながる。
認知	・因果関係を楽しむ遊びをたくさん経験する。 ・楽器に親しむ。	・Ａくんが操作できそうな遊具を多数用意し、操作によって結果が出る面白さが感じられるようにする。スイッチを押す、レバーを引く、紐を引っ張る、玉を落とすなど。 ・鉄琴や太鼓のようにバチで叩くものや、鈴、マラカスのように振って鳴らすものや、タンバリンやベルのように手で叩くもの、チャイムのように手で触れるものなどを試す。また、ピアノや歌に合わせて鳴らしてみる。	援助を受けて一緒にやることを繰り返すことで、経験が広がる。
社会性	・教員とのふれあい遊びや物を介しての遊びを楽しむことができる。	・手遊び歌、くすぐり遊び、振り回し遊び、ゆさぶり遊びなど（二項関係の遊び）を誘う。 ・ブランコ、カート、遊具、絵本、電車、音楽をかけるなど（三項関係の遊び）を誘う。	ふれあい遊びや感覚遊びを思い切り楽しむのが必要な時期かもしれない。

助して食べる経験を積み重ね、食事動作のイメージを持てることが重要。食材の形状については、作業療法士（以下 OT、同様に理学療法士を PT と表記する）の来校により評価してもらう必要がある。食材の形態と食事動作は関連しているので、どちらを優先するかの見極めも必要である。

b.「身体・運動」について。様々な運動経験をする機会を設けることは重要だが、幼稚部の場においては訓練的に行うことは避けるのが肝要。介助をしながら体験するということを長期にわたって取り組む。介助については「動かし方を教える」という発想で行う。

c.「コミュニケーション」の写真カード使用について。タッチして伝える操作を援助する場合は、タイミングを外さず、視線をとらえて即時にテンポよく介助することが大切。体の動きに課題がある幼児は応答に時間がかかるが、介助することで幼稚部の他児と同じように一緒にやることが必要。自分で動きたい気持ち、動こうとする気持ちを育てるためにも「一緒に」の観点をはずさない。

d.「認知」の操作と結果の理解や探索については、援助を受けて一緒にやることを繰り返すことがまず重要であること。それで経験を広げていくことがスタートである。

e.「社会性」の育みについては、ふれあい遊び感覚遊びをとことん楽しむことが優先されてよい。思い切り楽しむことで要求などの動きも出てくるのではないか。

桐が丘コーディネーターよりの支援の配慮を参考にして、知的障害幼稚部においては、幼稚部の学習活動に参加することで動くことへの意欲を喚起するとともに、諸側面の発達を促していくことをめざした。

3）「個別教育計画」に基づく支援の実際

①　集団への参加を通しての発達支援

連携機関からのアドバイスを受け、知的障害幼稚部においては、一緒に活動する中で友だちへの関心を育てることを優先的取り組みとした。それが、A児の動きたい、動こうとする意欲を高めると想定した。まずは、A児が幼稚部の集団の一員として学習活動に参加できるための道具立てが必要であり、前年度の子育てひろば参加時に準備したキャスター付き座位保持椅子が活用された。

入学後の育ちについて、友だちへの関心や関わり、それに併せての動きの発生、連携機関からの情報などの観点からまとめたものが Table3 である。保護者とやりとりした連絡帳の記述を整理したものである。

幼稚部においては、運動発達に向けての積極的な関わりも視野に入れてはいたが、まずは不適切な援助で姿勢や骨格に悪影響がないよう、情報収集に努めた。連携機関からはさまざまに配慮や具体的援助方法について助言、提案をいただき、毎日の指導場面に活かしてきた。巡回指導等で来訪した PT，OT から何よりも強調されたのは、A児が「友だちといっしょに活動しているという実感を持つということ」、「いっしょに動きたいという意欲を育てること」であった。すべての支援はここがスタートであると受け止めて取り組んできた。そこで、自由な場面では、A児の友だちへの関心に気づくと、視線や体の向きに留意して、関わりにつながる姿勢がとれるよう配慮してきた。（Fig. 1　Fig. 2）

Fig.1　ともだちといっしょに歌紙芝居

Fig.2　プラレール遊び

Table3　入学後１年目の主な様子と他機関との連携

	生活年齢	友だちや家族、教員との関わり。理解の育ち。	運動面での様子	関係機関より （母）－母を介しての情報交換 （Co）－桐が丘支援部コーディネーター
4月	3：8	・友だちがプラレールで遊んでいるとはいはいで近寄る。	・給食時、手を伸ばして皿を引く。	・給食時の姿勢の保持、摂食の支援、体育でのサーキット運動のマット設定と援助方法について助言（Co来校）
5月	3：9	・友だちのシャボン玉遊びに注目している。	・坐位を保ちタンバリンをたたく ・援助を受けて洗面台に寄りかかって立つ。	
6月	3：10	・「電車ごっこ」で友だちに椅子を引いてもらう。	・造形活動で絵の具を足の裏につけて、支えられながらジャンプ。	・STとVOCAの使用について意見交換（母） ・PT訓練を参観（機関を訪問）
7月	3：11	・タンバリンをたたいている隣の子の方に身を乗り出して手を伸ばす。	・歌に合わせて、右手を上げて振る。踊っているかのよう。 ・設定保育体育のサーキットで介助されながらマットの上り下り、ネットくぐり。 ・床に置いてあったタンバリンに手を伸ばす。音楽を聴いて膝立ちで体を揺らす。 ・楽器を押して音を出す、握る、くわえるなどの探索あり。	・８月のPT訓練で、好きな電車のDVDを見ながら、立って体を支えられる場面あり。（母） ・PT訓練では、「やらされている」感が強いと怒り出す。（母） ・PT訓練時、ハイハイで腰が上がるようになったが、両手両足が同時に出てしまう点を相談。部屋にクッションやマットレスを置いて障害物をたくさんおいてそれをまたいで移動するという環境設定を勧められる。（母） ・幼稚部の依頼を受け、安全のためのヘッドギアを作成。 ・ST訓練で、ボタンスイッチの仕組みを理解して動く様子（母）
9月	4：0	・友だちが家でA児を「A君」と読んでいる話題を受け、家で話題にしたら、にやっと笑う。 ・友だちが大勢いる遊戯室と静かな部屋の境目にいることが多い。 ・トランポリンにつかまり立ちをし、トランポリン上の友だちと歌を歌ったり、上に寝て揺すられたりした。 ・音楽やお気に入りの車両なしで、機嫌を崩すことなくお友達と同じ場でプラレールやぬいぐるみを探索している。 ・設定遊びの授業で、友だちが椅子を動かすのを手伝ってくれたり、泣きそうになるのをなだめてくれたりした。 ・みんなが好きな「ドードレブスカポルカ」の曲をCD出かけるとにこにこする。 ・おしゃぶりホルダーを使うことなく、みんなの動きを目で追い、ハイハイし、プラレールの箱をのぞき込む。 ・家庭で、母が妹に離乳食をあげている時、じっと見つめて、母の手を触る。	・「おもちゃのチャチャチャ」のカードに手を伸ばす、音楽に合わせて体を揺らす。 ・プール遊びで成田エクスプレスのおもちゃを持ったり放したりして遊ぶ。 ・「あぶぶ～」「ぶるぶる～」という唇を使った発声が頻繁。 ・食事に手を伸ばすことが多い。好きな食べ物にかじりついたり手で何とかしようとしたりしている。 ・家でテレビを触っては顔を近づけたりする姿が初めてみられる。テレビボードに手を添えてつかまり立ちをしようとする姿も見られた。 ・シウマイ、バナナをフォークにさして皿において置くと手で持って口に運ぶのが上手になってきた。 ・MDデッキのスイッチを押す動作がみられた。鈴を持ってなめる、振る。右手に鈴をもち、左手でタンバリンをいじっていた。	・STより、おしゃぶりホルダーの使用を助言（母） ・給食の介助についてOTに電話で相談。 ・ST訓練では、大好きな電車のDVDを見るためにパソコンを操作。PT訓練では立位、歩行の練習。疲れて大号泣。（母） ・ハイハイのスピードが上がってきたこと、歩行の練習を始めたことを受け、歩行補助具の検討が提案される（Co）

10月	4：1	・教師の「バイバイ」に手を伸ばす。 ・個別指導や食事介助の担当教員をずっと目で追う。 ・昼休みにハイハイのまま、勢いよくテラスに出る。お友達が外に出たのに誘われた様子。カーゴ（かご型リヤカー）に友だちと一緒に乗って校庭を３周回る。 ・友だちがプラレールを広げて遊び始めるととんでいき、大きな新幹線型の線路を友だち３人と一緒にとり囲んで遊ぶ。ある友だちが連結させたプラレールを引っ張って回るとA児も這っておいかけた。 ・友だちが椅子に座って歌紙芝居をめくっていると、膝立ちでのびあがってのぞきこみ、一緒にめくろうとしていた。（Fig. 1）	・あちこち這っていくスピードが速い。 ・流しに這っていき、つかまって膝立ち。 ・安定した坐位で絵の具遊びに飽きずに参加。 ・あつまりの「呼名」で、教師の手にタッチで応答。 ・設定保育体育のボール転がしでで、支えの手を離れ、自分から這って的を触りに行った。 ・流しの水遊びで、足裏をつけて突っ張って立つ。脇と胸を支えると手を使う。 ・バランスボールで、足裏をつけてもたれたり、弾んだりする。	・桐が丘Coの参観。自由遊び時間の移動や姿勢の状況について観察。あつまりや設定保育体育での学習活動参加の様子を観察。立位練習時の体幹の支え方やバランスボールの援助方法について助言あり。 ・運動支援ボランティアが、PT訓練を参観。後日レポートにて報告あり。その日は泣き通し。 ・PTに相談し、歩行器を検討。立位と同じ目線で移動することの楽しみ、視野の変化を体感させていくのに有効とのこと。（母） ・VOCAについてSTに相談。コミュニケーションの手段として用いるのは早いかもしれないが、「これを押せば物事が変化する」といった気持ちを芽生えさせるのにはとてもよいとのこと。（母）
11月	4：2	・家庭で朝の集まりの再現をすると呼名で手を合わせた。 ・みんなが外に出ると玄関へ。A児がカーゴに乗ると友だちも「いっしょ」のサインをして乗り込む。二人乗って、「ばすごっこ」を歌いながら、後者の周りを３周。途中、別の友だちがやってきてカーゴを押してくれる。 ・みんなと一緒に「トンボのめがね」も歌に合わせて移動。 ・外に行きたいと玄関ドアを頭でとんとんしていたが、あつまりのベルの合図で素早くハイハイで移動して戻る。	・文化祭練習でキャスター椅子にタンバリンをつける補助具を使用。体を揺らして触れる。 ・家で、テーブルにつかまり立ちしてたっちの練習。目の前に電車のDVDをおくと泣かずに続けられる。 ・ベルトで転倒を防ぎ、幼児用椅子に着席する。足の高さがちょうどよく、両足で床を打っていた。 ・後ろから股間の支えのみで机に寄りかかり、長く立位を保つ。 ・昇降口の段差をハイハイで体をひねり膝を持ち上げ、自力で乗り越える。	・電車のDVDを利用することで泣かずにPT訓練遂行。足が前に出るようになってきている。歩行器発注。（母） ・OT来校。桐が丘Co3名も来校して、一緒に説明を聞き、学校生活での日常的配慮について解説。
12月	4：3	・カーゴ遊びで、「もう一回やるひと？」と聞くと、手にタッチする。 ・「電車だいすき」の歌紙芝居を友だちととりあう。	・体育のボール遊びで、ボールのたくさん入ったケースに近づき、手でつかもうとするような動きあり。 ・造形で、床に広げた大きな紙に水性マーカーを手にして、前屈姿勢でなぐり書きをした。 ・「あくしゅでこんにちは」を援助を受けて歩行で参加。４～５回、左足を曲げて前に出す動作が見られた。	
1月	4：4	・食事中、体を揺らすので「ストップ」と言ったら止まった。 ・朝の集まりで、挨拶の係。VOCAを使用する。	・スティック状のポテトのおやつを手に持ち、押し込むように食べる。 ・毎日15分程度歩行器を使用。周りの友だちに注意が向くと動こうとして、足で蹴って後ろに下がる、向きを変える、伸び上がる（立ち上がる）姿が見られた。	・PT来校。歩行器の高さ調整。歩行器使用時の配慮、援助方法について教示。「動き回る友だちがいる環境がAちゃんにとってよかった」 ・OT訓練で、泣きながら訓練室からハイハイで抜け脱す。（母）
2月	4：5	・電車ごっこで、友だちがキャスター椅子にゴム紐をかけて引っ張ってくれる。 ・友だちと手をつないで、ダンスをする（キャスター椅子で）。	・歩行器で、前進後退よりもつっぱって立ち上がり腰を浮かせていることがよく見られた。	・PTより。坐位の時は足を伸ばす。太ももの裏側（膝上）を伸ばすことで立位が導きやすい。手の感覚を育てるために手のひらをのマッサージが有効。（母）

② 幼稚部生活における運動発達支援

もう一つは、生活の流れの中で、本児の気持ちに沿う形で運動発達支援を行うことであった。

人への意識や状況の理解が進むにつれて、通所してのPT訓練、OT訓練場面で、泣いて終わってしまうことが続いた。訓練を拒否する意思表示と受け止められた。担当者も本児の興味を引く様々な工夫をして臨んだが、一時的なもので終わることが多かった。

訓練場面を参観した運動支援ボランティアからPTの意見として下記のようなレポートがあった。

「歩行への準備期としての現在のリハビリはA君にとって苦痛（かなりのストレス）となっているようだ。A君自身が立位移動の楽しさをしらないことが要因であると考えられる。現在の移動手段（四這い）でA君が不自由を感じず（満足し）、立位移動のイメージ、快感、楽しさを知らないままのリハビリには限界があり、今は越えるべき峠の前に来ている状態。歩行器使用前に、視線を変えた動き（立位）のイメージから立つ必然性をA君自身が感じる必要性がある。」（2010年10月）「立位、歩行に対して、いかにA君のモチベーションを高めるかが大きな課題となっている」（2011年8月）

幼稚部の集団活動の中で、立位へのイメージ作りを行い、一緒に動く楽しさを経験し、モチベーションを高めていくための取り組みに関しては前項で述べたが、運動発達支援についての具体的取り組みについては方向性が見いだせない時期が続いた。

この後、運動支援ボランティアの協力を得て、運動場面の行動観察を行い、一日の日課の中で、重点的に取り組む時間帯と取り組み方法をTable4のように設定した。

なお、これらの取り組みについての注意事項としてPTからは下記のような情報が提供された。

・過剰な補助は避ける。
・立つ前、座る前に確認をする。
・立位の重心の置き方、腰の位置に気をつける。
・片足姿勢で、右軸足の安定を図っていく。
・手のひら、足の裏へ適切な刺激を与える。
・適宜、マッサージを行うことは有効である。

Table4　幼稚部の日課と運動発達支援の機会

	日　課	取り組み内容と方法	補助具等
9：30	登園	**立位姿勢または補助歩行** 保護者からの引き渡し時。バギー、または自転車から降りて靴箱に進むまでの間。	補装靴
10：00	着替え	**立ち上がりから立位姿勢** ズボンの脱ぎ履き時。椅子に腰掛けた姿勢から立ち上がり、机を支えとして、立位。	補助机 （立位に合う高さの中高用）
10：45	自由遊び	**立位姿勢、補助歩行** ・歩行器を用いての遊戯室内の移動。 ・巧技台に歌紙芝居を立てかけたり、おもちゃをおいたりして、立位で注目。 ・トランポリンでの抗重力姿勢。	歩行器（SRCウォーカー） 巧技台 トランポリン
	あつまり	**立位姿勢、補助歩行** ・「あいさつ」の係。補助を受けて起立。補助歩行で前に出て立位。 ・歌遊びにおいて、補助歩行で移動。楽器などを持って移動する場合はキャスター付き座位保持椅子を利用。	キャスター付き座位保持椅子
11：20	設定保育	「体育」ではねらいに沿った活動に援助を受けて参加。バランスボール、マット、ボール遊びなど「造形」は主に手指を使った操作活動。	各種体育用具
12：00	給食	**立位姿勢、坐位の安定** 補助を受けて立位で手洗い。足置きをセットし座位を保持して食事。	足置き
13：00 14：00	着替え あつまり 下校	**立位姿勢、補助歩行** 降園時。保護者への引き渡しは立位から補助歩行でバギーに接近。	

Table 5　A児の KIDS スケール評価

	3歳10ヶ月		4歳7ヶ月	
	得点	発達年齢	得点	発達年齢
運　動	5	0：1	11	0：11
操　作	5	0：5	7	0：7
理解言語	7	0：7	7	0：7
表出言語	4	0：4	8	0：8
概　念	0	0	0	0
対子ども	1	1：0	2	1：1
対大人	4	0：4	10	0：10
しつけ	0	0	0	0
食　事	9	0：9	9	0：9
総　合	35	0：5	62	0：10

3．経過と今後の課題

入学後1年余りのA児の成長を KIDS スケールで評価したものが Table5 である。

これは、「個別教育計画」に基づき本児の全体的発達をめざして支援の取り組みを行ってきた結果であるが、集団活動への参加が大きく寄与していると考えられる。

前川（2008）は、「ロマンティックサイエンスと教育」の講演の中で、子どもの動きを導くことについてこう問いかけている。「動かすことではない。子どもが自分の気持ちから動く、そのことをどうしたらうまく導き出せるか」。私たちの取り組みの焦点もまさにそこにあった。さらに「意欲というのは、その子がやりたいという思いを周りがきちんと受け止めることで、よりやろうという意欲として生れてきます」とあるように、幼稚部の環境の中で、関わりたい、やってみたいという意欲の芽生えに最大限応えていくことに配慮した。

外界への意識の育ちが顕著になる中で、幼稚部での同年齢の友だちから受ける刺激が意欲につながったととらえている。

一時は立位や歩行の訓練場面で泣いていたA児であるが、その後保護者からは次のような報告があった。

「現在は‘立つ’喜びを見いだし始め、『立たせて欲しい』と訴えることが多くなってきた。峠を越え、次のステップにいこうとしている感じです。」

この気持ちの変化には Table3 でみたように「友だちと一緒に活動したい」という思いが背景にあると確信している。A児にとって、活動参加の意欲こそが、運動発達を支える原動力とも考えられた。（Fig. 3　Fig. 4

Fig.3　設定保育体育「わに」の動きを模倣

Fig.4　設定保育造形立位で絵の具遊び

Fig.5 朝のあつまりで、紙芝居をめくる係を担当

Fig. 5）

複数機関との間で、本児の諸側面の発達を支えるべく連携をしてきたが、それぞれの専門性がどのように活か

されたか、その成果をどうとらえるか、さらに実践を積み重ねる中で検証していきたい。

謝辞

本報告をまとめるにあたり、Ａさんの保護者においては、資料提供や写真の使用に関して、多大なご理解とご協力を頂きました。ご両親は、モワットウィルソン症候群の家族会設立にご尽力されておられます。関連して、様々な側面からの示唆に富むご意見の提供もいただきました。この場を借りて深くお礼申し上げます。

心身障害児総合医療療育センター、リハビリテーション室の先生方に参観時の丁寧なアドバイス、巡回相談等での支援方法の示範等のご支援をいただき、たくさん学ばせていただき、ありがとうございました。

また、幼稚部に継続して関わって下さっている運動発達支援ボランティア小森紀子先生（モダンバレエ教室主宰）には行動観察記録や療育参観レポートの提供、支援の方策についての貴重なご意見等、たくさんのご支援をいただきました。心より感謝しております。

文献

前川久男（2008）ロマンチックサイエンスと教育　筑波大学特別支援教育研究第３巻

村中亜弥（2011）統合保育における肢体不自由児の運動支援に関する研究～運動量確保の観点から～第 29 回医療体育研究会／第 12 回日本アダプテッド体育・スポーツ学会　第 10 回合同大会抄録集 25p

水野誠司
http://www.aichi-colony.jp/library/mowat-wilson-j.htm

澤江幸則（2012 刊行予定）運動発達の問題・障害と支援　無藤隆・長崎勤．編著　発達科学ハンドブック６（新曜社）

髙橋幸子・上田みどり・田口憲司・福元康弘・仲元千斗星・林田佳奈・野村勝彦・田丸秋穂・城戸　宏則（2010）発達障害や障害を併せ有する幼児のアセスメントと支援方法、園へ支援の在り方に関する研究～その（１）子育てひろば参加者への支援事例を通して～筑波大学特別支援教育研究第５巻